

聖 書：マタイ 26：1～16

説教題：埋葬する備え

日 時：2020年7月12日（朝拝）

マタイの福音書はいよいよクライマックスの部分へと入ります。今日から見る 26 章では主にイエス様の逮捕について、次の 27 章では十字架について、そして最終章 28 章では復活について記されます。まず 26 章 1 節に「イエスはこれらのことばをすべて語り終えると、弟子たちに言わされた」と記され、2 節にこのような言葉が記されています。

「あなたがたも知っているとおり、二日たつと過越の祭りになります。そして、人の子は十字架につけられるために引き渡されます。」 イエス様はここでいよいよご自身が十字架に付けられる時が来たことを告げられます。それは 2 日後に始まる過越の祭りの時に起こると。ここに私たちが見るのは、イエス様はこれから起こることをすべて知っておられるということです。イエス様の十字架は予想もしなかった時に突然捕らえられて、不本意に実行されたことではありませんでした。イエス様はご自分が捕らえられるタイミングも正確にご存知でした。なのに逃げようとはされない。むしろ進んでこれを受けようとしておられます。慌てることなく、静かな心で、このことを話しておられます。

また 2 日後という日数ばかりではなく、「過越の祭りの時に」ということにも意味があります。ご存知の通り、過越の祭りはイスラエルがエジプトの奴隸状態から救い出されたことを記念する祭りでした。神の命令に従って子羊を屠り、その血を二本の門柱と鴨居に塗った家は神のさばきが過越しました。この神の救いのみわざを祝う祭りの時にイエス様は十字架にかけられる。つまりこれはイエス様こそ過越の祭りの子羊が指示して来たまことの神の子羊であるということです。イエス様の身代わりの死という犠牲を通してこそ、神の救いは成し遂げられる。その死がちょうど過越の祭りの期間に起こるようになるとすべてのスケジュールは導かれて来たのです。

このイエス様の言葉と並べられるようにして、3～5 節には祭司長や民の長老たちの動きが記されます。彼らは大祭司カヤバの邸宅に非公式に集まり、イエスをだまして捕らえ、殺そうと相談します。これまで彼らはイエス様に繰り返し戦いを挑みましたが、すべては失敗に終わりました。論争ではイエス様に勝てませんでした。そこでだまして捕らえて、一気に葬り去ろうとの謀略を巡らしたのです。ここに私たちは神の驚くべき摂

理の御手を見させられます。祭司長たちは誰かに強制されて、この相談をしたのではありませんでした。彼らは彼らの意志でイエス様を殺すために最終的に動き始めました。そのタイミングがイエス様の2節の予告と見事に並んで一致しています。彼らは彼らの悪い考えに従って、この陰謀を計画したまでですが、こうして彼らは神の御心が実行されるために用いられる道具となるのです。もちろん彼らとしては神に従おうとしてこのことをするのではなく、自分たちの悪意によってイエス様に手をかけるのですから、その悪事は当然さばかれます。しかし敵対する者の悪さえも逆に用いて深い御心を実現される神の隠れた、驚くべき、神秘的な主権の御手を私たちはここに見させられるのです。

祭司長たちは5節で「祭りの間はやめておこう。民の間に騒ぎが起こるといけない」と話しました。過越の祭りはユダヤの最大の祭りで、世界中から多くの人々が巡礼のためにエルサレムに上って来ます。神がメシヤを送ってくださり、我らを再び高く上げてくださるということを熱心に求めるユダヤ人の宗教的感情がこの上なく高まる時です。そんな時にイエス様に手をかけたらどんな暴動に発展するか分かりません。また騒動を起こした罪でローマからどのように罰され、自分たちの上に大変な不利益が生じるか分かりません。そこでこの祭りの期間はやめておこうと彼らは話し合いました。過越の祭りは一週間続きますから、2日後からその祭りが始まるときすれば、策略実行は少なくとも9日以降に！ということになります。そうだとすると過越の祭りの時に引き渡されると言われたイエス様の先の予告と日にちがずれることになります。しかしそのことは14節以降の出来事によって変わって来ます。14節にユダの裏切りが記されます。何とイエス様の弟子の中から、しかも12使徒の中から裏切り者が出るのです。祭司長たちからすればまさかの助っ人です。考えられない助け手が向こうから現れて來た。それでもなぜユダはイエス様を裏切ったのでしょうか。昔から色々なことが言われて來ました。彼はイエス様に期待を置いて従って來たが、イエス様に失望したからではないか。早くに地上に王国を建てるこを望んで來たが、どうもイエス様は自分が思っている救い主とは違う。ローマ帝国を倒して新しい国を打ち立ててくれると思ったのに、そうでない。革命的ではない。そのアプローチは静かで、平和的。もう待ちきれないと思ったのか。あるいはこのままではイエスを中心とするムーブメントは失敗すると見限ったのかもしれません。やがてこの人は捕らえられ、滅びに至る。そんな人と一緒にいるより、今のうちに鞍替えしておくべきではないかと考えたのか。あるいはユダはイエス様を偽メシヤと考えて、当局者に渡すべきであると判断したのか。あるいは金銭欲に惑わされても言われます。ここでもユダは祭司長たちにところへ行って、「私に何をくれますか」

と尋ね、銀貨 30 枚を受け取ります。しかし銀貨 30 枚はそれほど大きな金額ではなかつたようです。もしお金が彼の第一目的だったら、もっと高い額を要求し、取引したに違いありません。多くの学者が言うのは、ユダが裏切った理由はこの中のどれか一つではなくて、これらの要素のいくつかが複合的に絡み合ってというものです。彼がイエス様を裏切ったということは、そこには確かにイエス様が彼が思った通りの人ではないと失望したことがあったのでしょう。彼は自分の期待が裏切られたと感じた。その複雑な感情、そこには落胆もあり、あるいは怒りもあり、またジェラシーのようなものもあって、それらが混じり合って、自分の手でこの方を敵の手に渡したいと思うようになった。自分の手で引導を渡そうという気になった。その際、彼が愛しているお金を幾らかは手にしつつと。このユダの行動の結果、イエス様の逮捕および十字架刑のスケジュールは、祭司長たちが当初予定していたスケジュールより一気に早まることになったのです。そのことによって過越の祭りとイエス様の死が、イエス様が予告された通り、一緒の時に起こるようになって行ったわけです。

このように今日の箇所では人間たちが陰謀を企み、忙しく動き始めます。思わぬ助つ人も登場して、いよいよ事は自分たちの願う方向に進み始めたと敵はほくそ笑んでいました。しかしどんな人間の企みも決して神の計画を引っ繰り返すことはできないということを私たちはここに見ます。どんなに知恵を絞り、チャンスをものにして、してやつたり！と考えていても、彼らは逆に神のご計画実現のために仕えさせられています。イエス様の十字架は決して予想外のハプニングやアクシデントではなく、神のご計画によることであり、神が導いてくださったことです。この神の奇しい主権を私たちはここにしっかりと見て行かなければならぬのです。

さてこのようにイエス様を殺そうとする人々の二つの記事に挟まれてひときわ美しい光を放っているのが、その間に記されている一人の女の香油注ぎの話です。この人の名前はここに記されていませんが、ヨハネの福音書 12 章に記されている記事と同一であるとすると、この人はマリヤであったことになります。お姉さんのマルタと、死から生き返させていただいたラザロを兄弟として持つあのマリヤです。彼女はここで非常に高価な香油の壺を持って来てイエス様の頭にそれを注ぎます。他の箇所でイエス様は、ご自分を家に招いたパリサイ人シモンに、「あなたはわたしの頭に油を塗ってくれなかつた」と語られたことがありましたが、客の頭に上質の油を塗ることは尊敬の行為として当時あつたようです。そのようにマリヤはここで非常に高価な特別な香油をふんだん

にイエス様のために用いました。これは彼女のイエス様に対する特別な思い、感謝、尊敬、愛、そして献身を現す行為だったのでしょう。その香りは一気にこの部屋に広がり、皆が注目するところとなつたに違いありません。

さてこれを見て弟子たちは憤慨して言いました。「何のために、こんな無駄なことをするのか。この香油なら高く売れて、貧しい人たちに施しができたのに。」彼らの発言はある意味で理解できます。彼らは普段質素な生活をしていたでしょう。こんな特別な香りがする香油を嗅いだことさえなかつたかもしれません。それをごくわずかな量だけ用いるならまだしも、マルコの福音書の平行記事によると、彼女は壺を割って全部イエス様に注ぎました。これはあまりにももったいない使い方である。これだけあれば貧しい人たちに十分に施しができた！と彼らは彼女の行為を責めました。なおヨハネの福音書 12 章によると、こう言ったのはイスカリオテのユダであったと記されています。そして「彼がこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼が盜人で、金入れを預かりながら、そこに入っているものを盗んでいたからであった」と注釈されています。ですからおそらくユダはこのような観点からこの主張をし、他の弟子たちは先に見た観点からユダの言葉に同調したのだろうと思います。

そんな彼らにイエス様は言われました。「なぜこの人を困らせるのですか。わたしに良いことをしてくれました」と。そして続けて言われました。「貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいます。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではありません」。貧しい人たちに施しをする機会はこれからもいくらでもある。しかしわたしにできる時は今しかない。それだけこの時は特別に重要な時であったということです。そして 12 節でイエス様は「この人はこの香油をわたしのからだに注いで、わたしを埋葬する備えをしてくれたのです」と言われました。これはどういう意味でしょうか。これは彼女が本当にこのことを知り、そういう目的で香油を注いだということなのでしょうか。おそらくそうではなかったと思います。そのことを示唆するものはここに何もありません。彼女としてはただ主への言い尽くせない感謝と献身の思いを、このような形で表現したのだと思います。しかしイエス様は彼女のこの行為を、ご自身の埋葬の備えとして受け取られた。ここからも分かることは、イエス様がこの時一番考えておられたのはご自分の十字架の死であったということです。私たちを救うための身代わりの死です。そのことに思いを集中して進んでおられるイエス様にとって、この彼女の奉仕は埋葬のための備えと見えた。死人の葬りの際には、臭くならないように、良い香りがするものを一緒

に体に巻きました。そのことを彼女はしてくれたとイエス様は言っているのです。少し人間的な言い方かもしれません、この彼女の行為は十字架の死へ向かおうとするイエス様にどんなに大きな慰め、喜び、力を与える出来事だったでしょうか。厳しい戦いに向かおうとするイエス様に、彼女はこのようにしてくれました。彼女はすべてを分かつていたわけではないでしようけれども、まさに彼女のしたことは時にかなったこととして、イエス様にとって大きな意味を持つ出来事であったのです。

そこでイエス様は13節でこう言います。「まことに、あなたがたに言います。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられるところでは、この人がしたこと、この人の記念として語られます。」 イエス様はこれから数日後に死に、埋葬されますが、その後、復活して、やがてその福音が全世界に宣べ伝えられる時が来ます。その時、彼女のしたことと一緒に語られることになると言われました。人々がこぞってイエス様に反対し、いのちを取ろうと動く中で、適切な時に適切な奉仕をした人として、彼女のことも一緒に語り伝えられる、と。これはどういう意味でしょうか。これは彼女に特別な栄誉が与えられるということでしょうか。確かに彼女のささげものは特別に高価でした。周りの人たちはそれを見て、もったいない！と言いました。そこまでする必要はあるのか！と疑問を呈しました。しかしなぜ彼女がこのようにしたのか、その理由を思い巡らす時、見えて來ることがあるのではないでしょうか。それは彼女がしたことよりも、もっともったいないことをしてくださった方がおられるということです。もっと大きな犠牲を払ってくださった方がおられるということです。もっと大きな献身を示してくださった方がおられるということです。それは言うまでもなくイエス様です。マリヤは特別な時のために取っておいた香油を一気に注ぎましたが、イエス様はそれ以上に高価なものを注いでくださいました。それはご自身のいのちです。イエス様はいよいよその時が来られたことを知って、ここでもご自分から十字架に向かって進んでおられます。イエス様こそ、私たちのためにご自身のすべてをささげて献身してくださった方です。マリヤはそのすべてを知っていたわけではないにしても、本質は分かっていたのでしょう。そのイエス様に私は自分の持てる最高のものをもって応答したいと。このようにしてこの彼女の献身は、より大きなイエス様の献身を浮かび上がらせるものとして特別の光を放っているのです。彼女がしたことはイエス様がしてくださったことに比べれば小さいものですが、イエス様はそれを喜んで受けておられます。そして福音のストーリーの一部とし、永遠に語り継がれるものとしてくださいました。私たちはここに大きな献身に対して一生懸命に自らをささげ、イエス様に喜ばれ、またイエス様の栄光のために用いられた人

の美しいストーリーを持っているのです。

私たちはこの女の人に続いて、イエス様の献身に対してどのように応答する者でしょうか。たとえ私たちがどんなに多くのもの、あるいは大きなものをささげても、イエス様がささげてくださったものに比べれば取るに足りません。しかしイエス様がしてくださったことに感謝して、私たちが心からの応答をささげる時、イエス様はそれを喜んで受け取ってくださいます。そしてご自身との関係における特別なストーリーとして記憶してくださいり、ご自身の栄光が現されるために用いてくださいます。私たちは今日の箇所を通して、ご自分から進んで十字架への道を歩まれたイエス様を見つめて、私たちそれぞれの方法で私たちの感謝の応答をイエス様にささげる者でありたいと思います。その応答をイエス様は喜んで受け止めてくださり、永遠の価値を持つ出来事として記念し、記憶してくださいます。そしてイエス様の栄光がさらに宣べ伝えられるために用いていただけという祝福の中を私たちも導かれて行きたいと思います。